

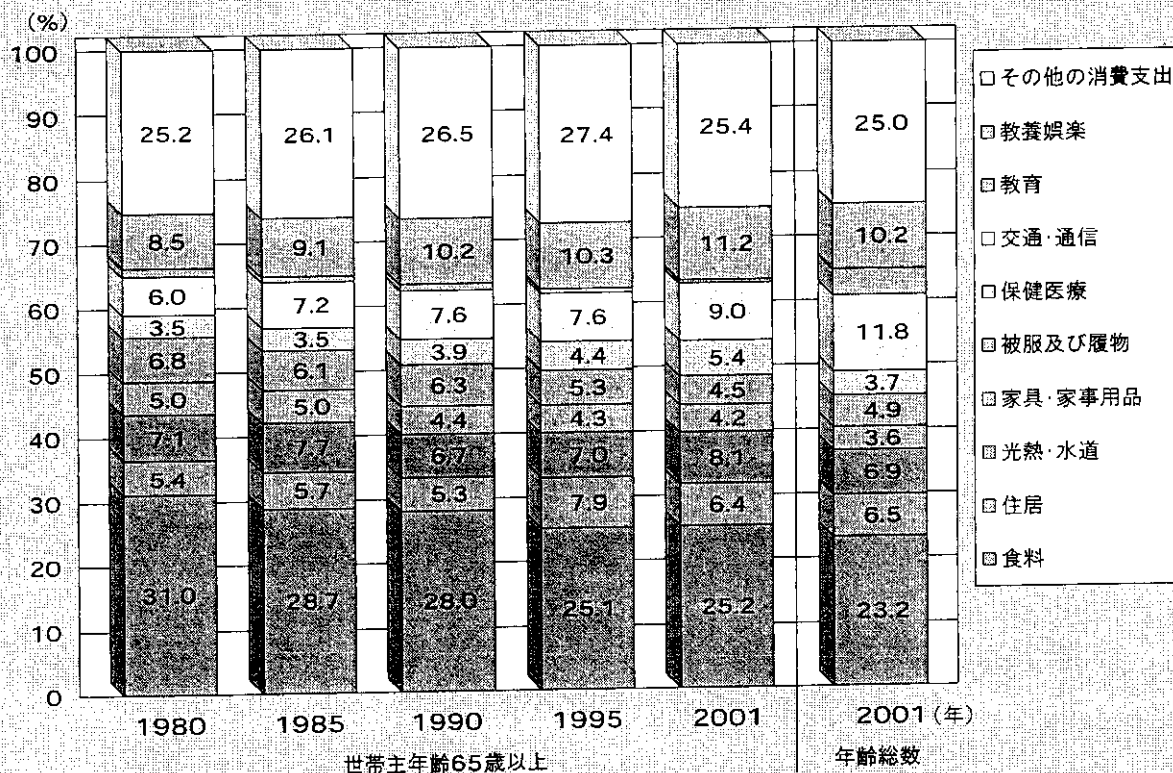
世帯主の年齢が65歳以上の世帯の収入と消費

(単位:円)

区 分	勤労者世帯		無職世帯	
	全 体	世帯主の年 齢が65歳 以上の世帯	全 体	世帯主の年 齢が65歳 以上の世帯
実収入	496,983	389,475	188,488	198,472
うち勤め先収入の占める割合(%)	(93.8)	(58.1)	(7.6)	(5.7)
社会保障給付の占める割合(%)	(3.4)	(39.1)	(84.4)	(87.7)
実支出	376,212	306,125	232,330	225,653
消費支出	298,733	264,349	212,363	207,040
非消費支出(税、社会保険料など)	77,478	41,776	19,967	18,613
可処分所得(実収入-非消費支出)	419,505	347,699	168,520	179,859
黒字(実収入-実支出=可処分所得-消費支出)	120,772	83,350	△43,843	△27,181
平均消費性向(%) (可処分所得に対する消費支出の割合)	71.2	76.0	126.0	115.1

資料:総務省「家計総世帯集計」(平成13年)
(注)年平均の1か月間の金額

世帯主の年齢が65歳以上の世帯における消費支出構成比の推移



資料:総務省「家計調査」より作成
(注)単身世帯は対象外

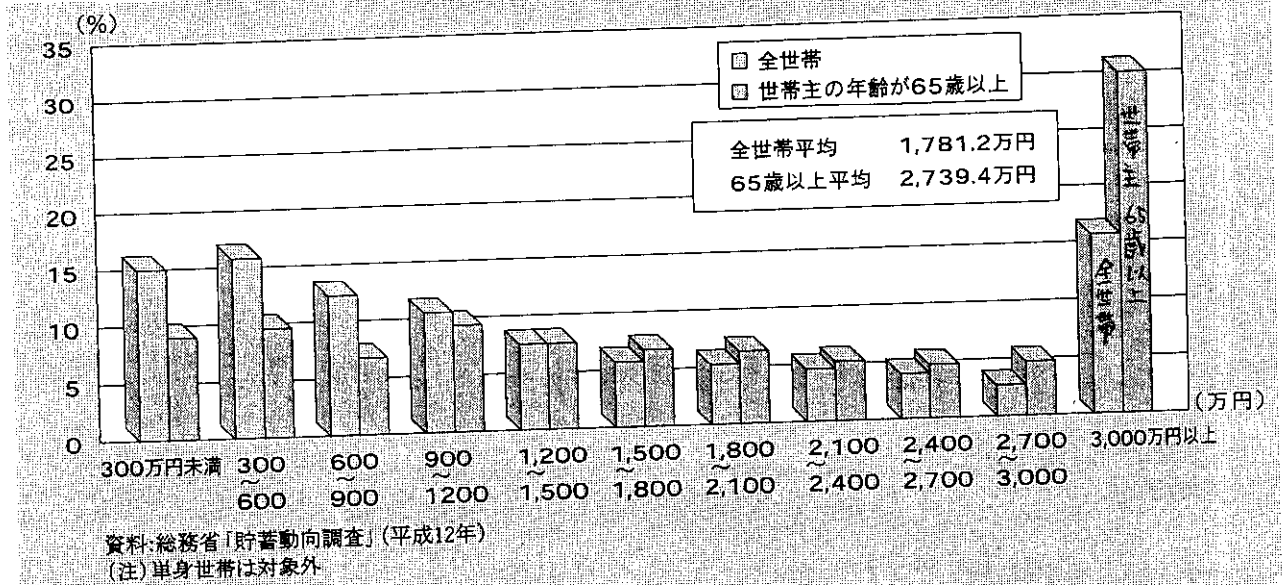
高齢者が世帯主である世帯の貯蓄

世帯主の年齢が65歳以上の世帯(二人以上の世帯)の貯蓄の状況についてみると、平成12(2000)年において、一世帯平均の貯蓄現在高は、2,739万4千円となっており、全世帯(1,781万2千円)の約1.5

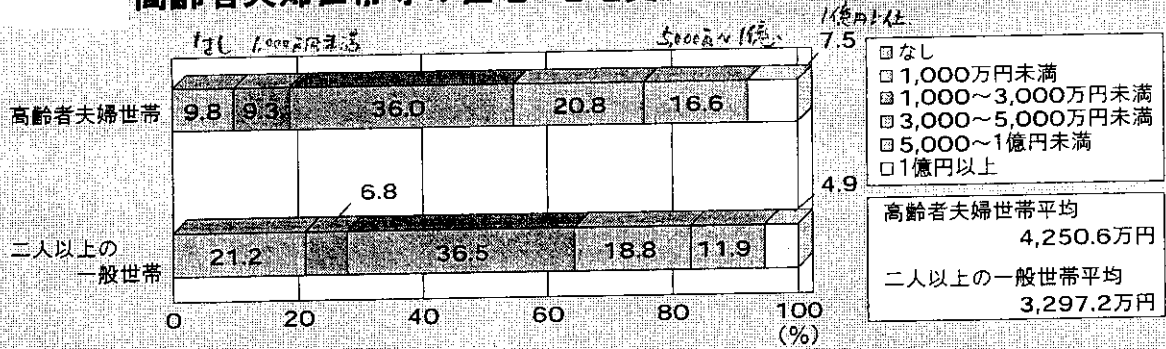
倍となっている。

貯蓄現在高階級の世帯分布をみると、世帯主の年齢が65歳以上の世帯では、3,000万円以上の貯蓄を有する世帯が29.9%と全体の約3割を占めている(図2-2-17)。

世帯主の年齢が65歳以上の世帯の貯蓄の分布

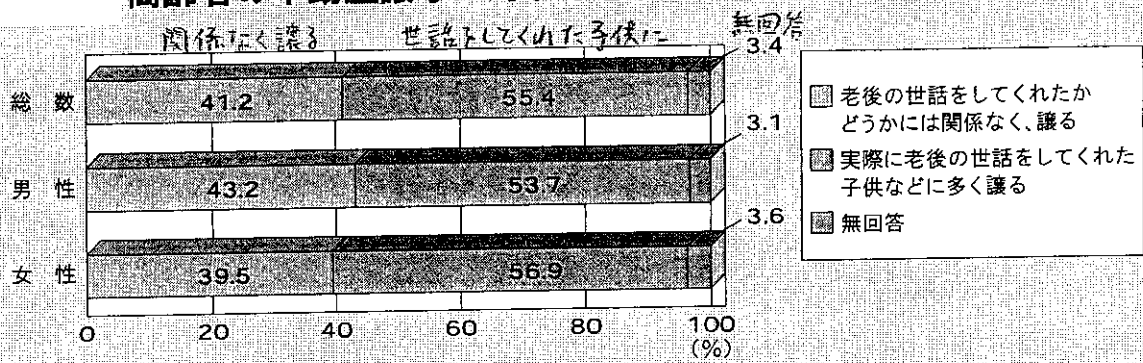


高齢者夫婦世帯等の住宅・宅地資産の分布



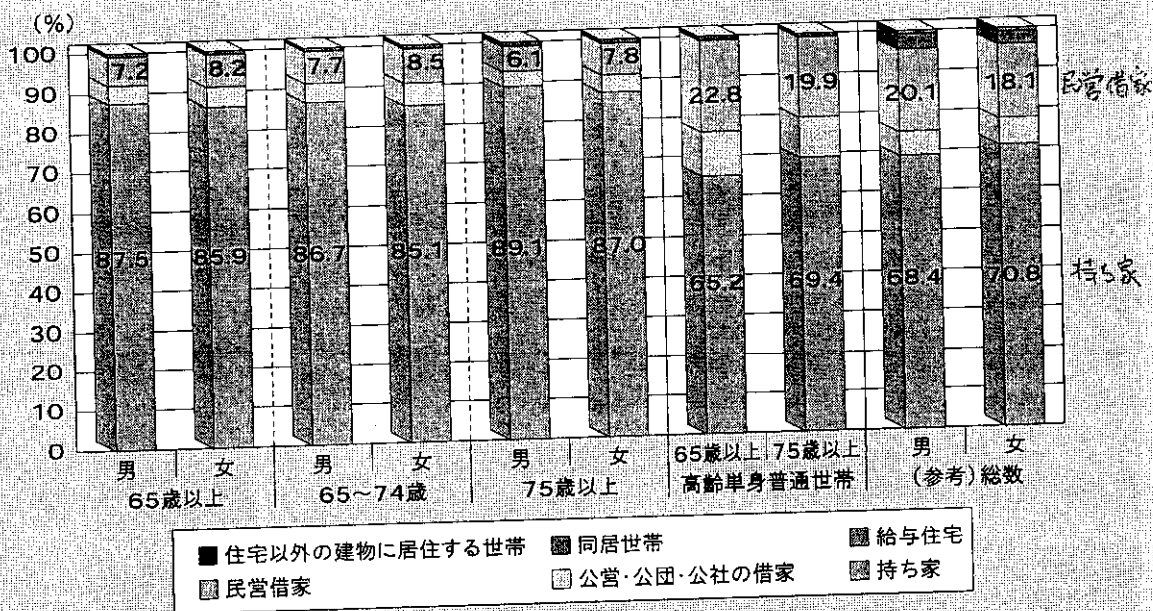
資料:総務省「全国消費実態調査」(平成11年)
 (注)高齢者夫婦世帯とは、夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみの世帯を指す。

高齢者の不動産譲与に対する態度



資料:内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(平成13年)
 (注)調査対象は、全国60歳以上の男女

高齢者の住宅(住宅の所有の関係別)



資料:総務庁「住宅・土地統計調査」(平成10年)

注:「同居世帯」とは、1住宅に2世帯以上住んでいる場合で、家の持ち主や借り主の世帯(「主世帯」)以外の世帯を意味する。

このように、高齢者の経済状況は平均してみれば現役世代に比べて遜色はなく、貯蓄や持ち家は現役世代よりも恵まれた状況にある者も多い。しかし、個人所得では女性高齢者は男性の3分の1と低いこと、一人暮らしの女性高齢者は一人当たり

世帯所得の平均額が低いこと、一人暮らし高齢者は持ち家率が低いことにみられるように、女性高齢者や一人暮らし高齢者の経済状況は必ずしも恵まれているとはいえない。

子供や孫との付き合い方については「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が増加しつつある。

子供が結婚した後の子供との同別居

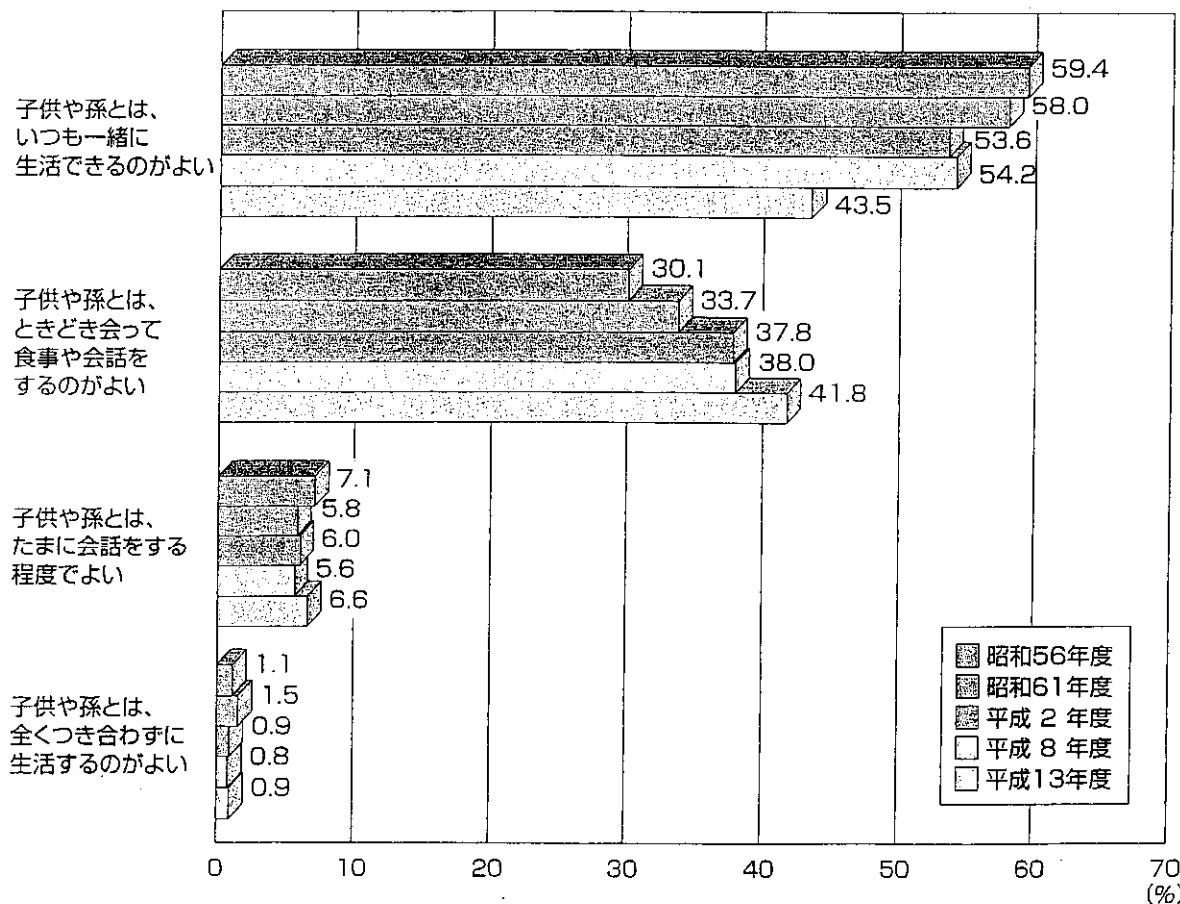
(単位:%、複数回答)

年齢階級 性別	総 数 (人)	同居する のがよい	息子夫婦 と同居する のがよい	娘夫婦と 同居する のがよい	子供夫婦 とは別居 するのが よい	その他	わからない
(40~59歳)							
総 数	1,227	35.3	23.3	12.0	56.1	0.6	8.1
男 性	515	40.4	31.1	9.3	48.9	0.6	10.1
女 性	712	31.6	17.7	13.9	61.2	0.6	6.6
(60歳以上)							
総 数	1,392	52.7	39.6	13.1	37.9	1.4	8.0
男 性	659	50.5	41.9	8.6	39.0	1.7	8.8
女 性	733	54.6	37.5	17.1	37.0	1.1	7.4

資料:総務庁「中高年齢層の高齢化問題に関する意識調査」(平成10年)

(注)回答は、回答者の現状とは関係なく考えを聞いた。

高齢者の子供や孫との付き合い方



資料:内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」

(注)日本における全国60歳以上の男女を対象とした調査結果

健康関連ビジネス

国民の健康に対する意識の高まりに対応して、健康関連ビジネスも大きく成長している。

健康関連ビジネスには、検診から健康増進施設（フィットネスクラブ等）に至るまで非常に広範な分野があるが、健康の向上や維持を図るためにこれらのサービスを適切に活用することは、高齢期における生活の質を高めるためにも有用であろう。

1996（平成8）年の健康・福祉関連サービス産業統計調査によると、フィットネスクラブなどの運動型健康増進施設やクアハウスなどの温泉利用型健康増進施設の事業者だけでも1,953に上り、その従事者数は全国で約5.1万人である。

最近、高齢者でも気軽に利用できるフィットネスクラブが増えつつあり、運動を楽しむ高齢者がよく見かけられる。こうした施設では、水中運動や簡単な運動など高齢者が健康づくりのために安全に行えるプログラムを用意するなどの配慮をしている。

コラム

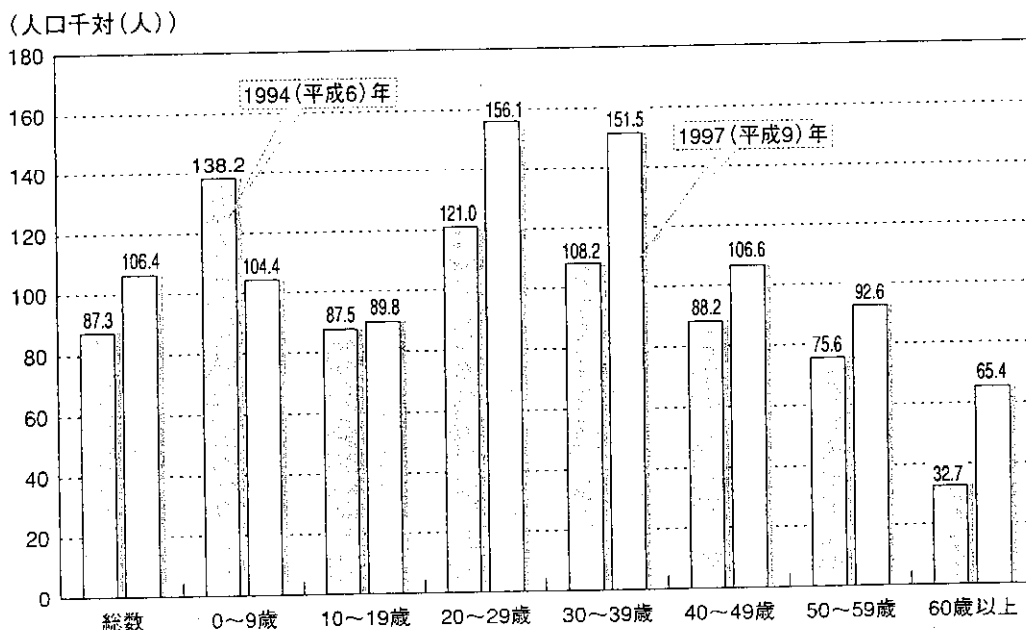
フィットネスクラブなど健康増進施設の利用状況

厚生省の調査によると、健康増進施設（フィットネスクラブ等）の利用者を年齢階層別にみると、20歳代の女性が最も多くなっているが、60歳以上の利用者も全体の13.3%を占めており、人口千人当たりの利用者数をみても、

1994（平成6）年から1997（平成9）年の3年間に2倍に増加している。

健康増進施設利用者の年齢層が広がり、高齢者においても比較的ニーズが高いことがうかがわれる。

図2-2-17 健康増進施設（スポーツクラブ、クアハウス等）利用者数



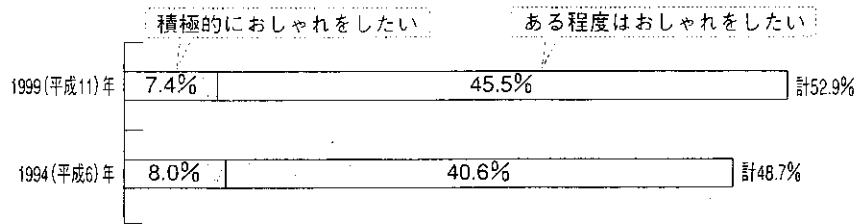
資料：厚生省大臣官房統計情報部「健康・福祉関連サービス需要実態調査」

(身だしなみ)

元気な高齢者が増え、また、社会に参加する機会が増えるにつれ、高齢者のおしゃれへの関心も高まっている。おしゃれに心がけ、清潔できちんとした身だしなみを保つ姿勢は、こころの健康を維持し、さらには高めるために有効であるといわれる。60歳以上の者が関心を持っているおしゃれは、男女共に「外出着」が最も多く、半数以上の者が関心を持っており、次いで「身だしなみ」となっている。

このように、服装や身だしなみに関心が高いが、これらが心理面に与える影響は大きい。日中、寝間着から洋服に着替える試みを行った施設では、装うことが緊張感を生むためか、高齢者が目に見えていきいきしてきたという報告例もある。

図2-2-16 60歳以上の者のおしゃれへの関心度



60歳以上の者が関心を持っているおしゃれ(3つまでの複数回答)

外出着	54.1%
身だしなみ(コーディネーション、全体の調和)	42.7%
整髪、髪型、髪の色、かつら	34.1%
普段着	24.1%
清潔、顔色、皮膚のつや	22.8%
姿勢	18.5%
礼儀・マナー	16.6%
靴	11.2%
化粧、香水	11.1%
趣味・スポーツなどの服装	8.4%
アクセサリ、ネクタイ	4.8%
バック、かばん	4.4%
流行、ブランド	1.8%

資料：総務庁「高齢者の日常生活に関する意識調査結果」(1999(平成11)年7月)

コラム

化粧の効用

特に女性の場合は、化粧が大きな心理的な効果を持つことが知られている。スキンケア、マッサージ、メイクアップなどの化粧効果が、気分の高揚による脳の活性化や免疫力の向上に役立つともいわれる。例えば、クリームで肌をマッサージすると血液の循環を良くするだけでなく、手を動かすことは、リハビリにもつながり、さらには、美しくなることで気分が明るく前向きになれるという効果が期待できる。このように嗅覚、視覚、触覚を動員した化粧行為は、心身の活性化に有効であるとの研究も行われている。

A病院で看護婦が女性患者にメイクの指導をするという「化粧療法」を週1回4か月間行った結果、9割近くの患者に表情の変化が見られ、痴呆性高齢者の中にはおむつが取れた者もいたという結果が出ている。(資生堂編「美しく年を重ねるヒント」求龍堂、1997年)

このような効果に着目し、化粧品会社が高齢者施設でメイクアップ講座を開講したり、美容専門学校などがボランティアで高齢者に化粧を施したり、高齢者が美しくかついきいきと過ごせるような試みが広がっている。

出典：平成12年版 厚生白書

近所の人たちとの交流や親しい友人の有無をみると、男性は女性よりも交流も友人も少ない。

高齢者と社会・地域

高齢者の社会参加活動

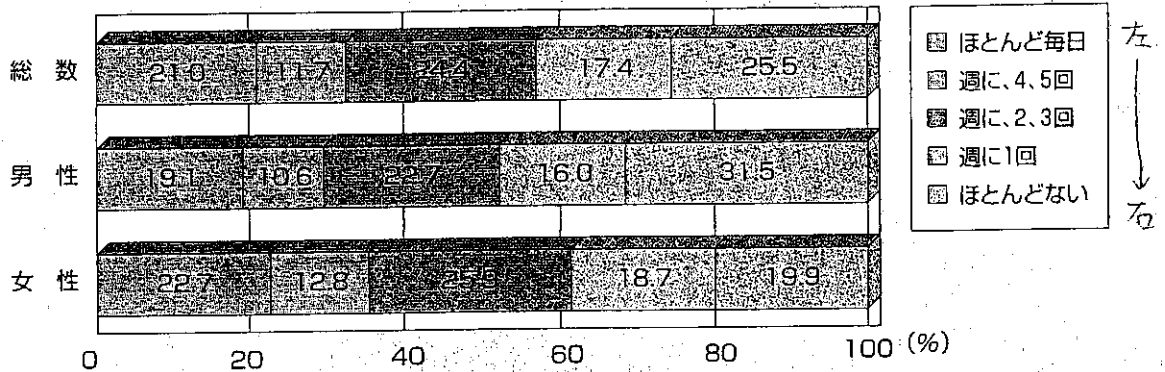
近所の人たちとの交流・友人の有無

近所の人たちとの交流についてみると、「ほとんどない」が25.5%、「ほとんど毎日」が21.0%となっている。特に男性は、「ほとんどない」が31.5%となっており、3人に1人が近所の人たちとの交流をもって

いない

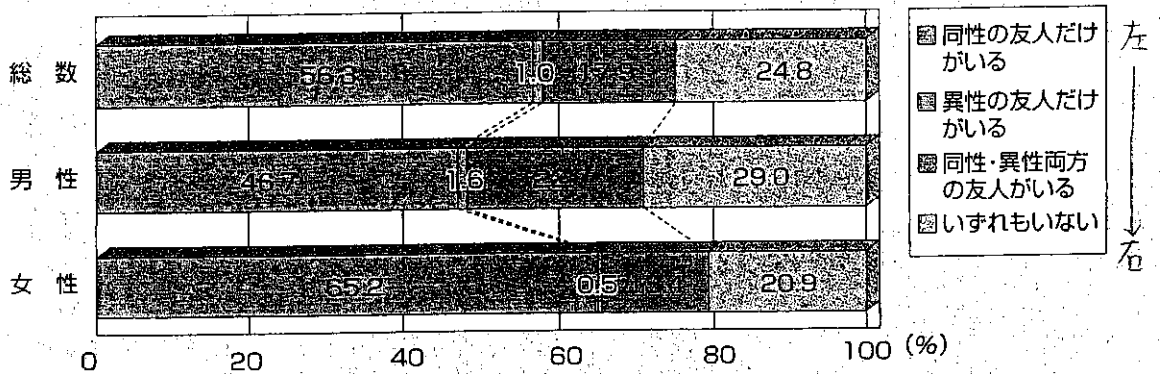
また、親しい友人の有無についてみると、「友人がいる」の割合は75.2%となっており、友人の性別は、「同性の友人だけがいる」が56.3%、「同性と異性の友人がいる」が17.9%、「異性の友人だけがいる」が1.0%となっている。

近所の人たちとの交流



資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」（平成13年）
 （注）全国60歳以上の男女を対象とした調査結果。

親しい友人の有無



資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」（平成13年）
 （注）同性・異性の友人の有無は男女別の「男性の友人がいる」、「女性の友人がいる」、「男女両方の友人がいる」を組替えた。